

過疎化が進行する地方都市中心市街地における 住民主体のまちづくりに向けた実践

太田 恭平¹・佐々木 葉²・武藤 隆晴³

¹学生会員 早稲田大学大学院 創造理工学研究科建設工学専攻
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1) E-mail: kyohei24ot@moegi.waseda.jp

²フェロー会員 早稲田大学教授 創造理工学部社会環境工学科
(〒169-8555 東京都新宿区大久保 3-4-1) E-mail: yoh@waseda.jp

³非会員 一般社団法人郡上八幡まちづくり会議
(〒501-4226 岐阜県郡上市八幡町 926) E-mail: m.takaharu0418@gmail.com

歴史的蓄積がある地方都市では人口減少によりまちを支える住民組織の存続が危うくなり、次世代の担い手の確保が喫緊の課題である。筆者らは、その全域が 2021 年に過疎地域に指定された岐阜県郡上市の郡上八幡において、まちづくりの担い手の拡大および具体的なアクションの試行を目的とした一連の取り組みを企画、実践した。本稿では、2022 年度より 3 か年に渡って実施計画中の取り組みについて報告する。

Key Words: まちづくり, 担い手, 持続的発展, 過疎地域, 郡上八幡

1. 人口減少したまちなかの再生

中濃地区の代表的都市の一つである岐阜県郡上市八幡町（以下「郡上八幡」）では、半世紀ほど前から郡上踊りや豊かな水環境、歴史的な町並み等を活かした住民主体のまちづくりが進み、行政と協働しながら成果をあげてきた。近年は移住者数も増加している一方で、これまでまちを支えてきた“町衆”の高齢化が進み、次世代のまちづくりの担い手の発掘が急務となっている。

一方で、2022年に郡上市はその全域が過疎地域に指定された。市内各地域で人口減少が著しいが、特に旧城下町の範囲に当たる郡上八幡の中心市街地は、他地域に比較して特に人口減少率が高く、空き家、空き地の急増等、まちの空洞化が深刻化している。

筆者らは郡上市からの業務委託に基づき、自らが責任感を持って郡上八幡のまちづくりに取り組む人材の拡大と、“町衆”が主体となった、空洞化が進む中心市街地のまちとしての持続に向けたアクションへと繋げる、一連の取り組みを企画、実施した。本稿では、2022年度より 3 か年に渡って実施した取り組みの概要とともに、各企画の意図や狙い、具体的な実践の内容と現時点での成果をまとめ、報告する。

2. 対象地および事業の概要

(1) 郡上八幡の概要

郡上八幡は岐阜県のほぼ中央に位置する町で、吉田川と小駄良川の合流地点周辺に中心市街地が広がり、**図-1**の通り 818ha が都市計画区域に指定されている¹⁾。都市計画区域内の人口は 2020 年時点で約 7,700 人である²⁾。

ユネスコ無形文化遺産に登録された郡上踊りや、伝統的水利用施設を含む豊かな水環境、一部が重伝建地区に指定されている伝統的町並み等を資源としたまちづくりと、それらをもとにした観光産業が発達している。

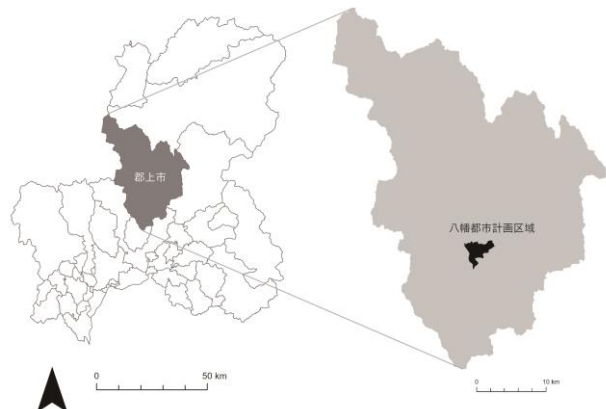


図-1 郡上市と八幡都市計画区域の位置

(2) 郡上八幡におけるまちづくりの担い手

郡上八幡には、これまでにまちづくりに関する多くの組織・団体が存在してきた。その一部を表-1に示す。それらは水環境や町並みの保存等に注力するテーマ型の組織のほか、水利用施設の管理のための組合、郡上踊りをはじめとする行事や催事を支える団体等、地縁を基盤とした組織が存在する。

しかし、そうした組織や団体の運営を担う住民の高齢化が進み、次世代を担う人材の不足に悩む組織や団体も多い。また、近年では移住者、Uターン者による新たな主体が参画したイベント実施のためのグループ等も存在するが、従前より存在する組織・団体と、新たな担い手との連携は必ずしも十分でない等、まちなかを支える“町衆”の再生が課題である。

(3) 過疎地域指定を受けた計画策定

郡上市においては、過疎地域自立促進特別措置法（旧法）に基づく過疎地域として明宝地域、和良地域が指定されていた。旧法が2021年3月末で期限を迎えたことで制定された過疎地域の持続的発展の支援に関する特別措置法（新法）の施行に伴い、2021年4月から八幡地域、美並地域が対象に追加された。さらに、2022年4月からは郡上市全域が過疎地域指定され、それを機に2022年9月に郡上市過疎地域持続的発展計画³⁾が策定された。

市全域を対象とした計画を受けつつも、郡上八幡の中心市街地に特化した計画策定が市によって起案された。具体的には、2022年度に「八幡市街地活性化調査・事業化メニュー検討事業」と「八幡市街地魅力再発見事業」が発注され、これを武藤が所属する一般社団法人郡上八幡まちづくり会議（以下「まちづくり会議」）が受託した。この位置付けをもとに、将来のまちづくりを担う人材の強化と拡大、まちなかと呼ばれる市街地での試行的アクションを企画した^{注1)}。その後2023年度事業として

「八幡市街地活性化調査・事業化メニュー検討事業」を、2024年度事業として「八幡市街地活性化調査・事業化メニュー実施事業」を同様に受託し、3か年に渡って一連の取り組みとして継続してきた。

著者らの役割としては、武藤は全体の統括を担い、企画構成の考案、市や関係者との調整等を担当した。佐々木は専門家アドバイザーとして参画し、武藤とともに企画構成の考案等を担当した。太田は、資料の作成や成果のとりまとめ等を担当した。また、共同事業者として、合同会社おでかけカンパニーの中嶋伸恵氏は主にグラフィックレコーディング（以下「グラレコ」）による記録を担当し、CRAFT OUTの笠井裕也氏は主に映像による記録を担当した。また早稲田大学景観・デザイン研究室は、企画運営の補佐や記録の整理等を担当した。

3. 実践の狙いと概要

(1) 全体的な狙いと企画の概要

一連の取り組み開始前の時点で、3か年のプログラム後の成果として、以下を期待した。

- ・ 人数は少なくとも、郡上八幡のまちに対して責任感を持って取り組む人が明確になる
 - ・ 郡上八幡のまちづくりの担い手の世代交代が起こるきっかけになる
 - ・ 将来の郡上八幡に必要なアクションが明確になる
- そのために、図-2のようなロードマップを設定した。

まずは、まちに対して責任感をもって、自らアクションを起こす人を明確にするため、ゼミナール形式のプログラムを実施する。2年目から、プログラムへの参加者を中心に具体的なアクションを立案し、実際に実証実験を行い、その成果を過疎が進行した中心市街地の活性化に資する取り組みとして、市の事業に繋げていく流れである。

表-1 郡上八幡における主なまちづくり関係の組織・団体

団体・組織名	創立年	構成メンバー	概要
さつきの会	1976	町内の有志	当初は勉強会の実施や町議会議員との意見交換等を行っていたが、郡上八幡の水環境に注目し、環境整備活動やポケットパーク製作、啓発活動等を行う。2005年解散。
柳町町並み保存会	1990	柳町地区の住民	伝統的な町並み保存のため、自主ルール等を策定。水路の維持管理やポケットパークの管理も行う。かつて町内にお土産屋を開業し経営活動を行っていた。
いかわと親しむ会	1990	常盤町地区の有志	いかわ小径と呼ばれる水路の清掃・管理、魚の放流等を行う。当初は会費を集め放流した魚を育てていたが、現在は観光協会が観光客向けに餌を販売している。
郡上・川と水の会	1990	青年会議所やロータリークラブ等の団体所属者	郡上全体の水環境保全のため、意見交換・啓発のための会合を開催。2000年頃に活動休止。
職人町町並み保存会	1991	職人町地区の住民	柳町町並み保存会の影響もあり、同じく伝統的な町並みが残る職人町地区において設立。町並み保存活動や水路の維持管理等を行う。2020年頃に活動休止。
鍛冶屋町町並み保存会	1993	鍛冶屋町地区の住民	柳町・職人町町並み保存会の影響もあり、同じく伝統的な町並みが残る鍛冶屋町地区において設立。町並み保存活動や水路の維持管理等を行う。2000年代前半に活動休止。
郡上八幡市街地まちづくり協議会	1998	町内の有志、行政職員	主に観光客向けの公共施設運営を行政より受託。地場製品の販売促進や、直営施設の運営も行う。
郡上八幡産業振興公社	1999	商工会、観光協会等の地元経済団体所属者	主に観光客向けの公共施設運営を行政より受託。地場製品の販売促進や、直営施設の運営も行う。
郡上八幡まちづくり NETWORK	1999	町内の有志	住民の郡上踊り離れ解消のため、縁日とは無関係の郡上踊り「納涼祭」の開催、地元商店による露店の出店調整を行う。
郡上八幡水の学校	2013	八幡町内の有志、大学等関係者	さつきの会の活動を引き継ぎつつ、郡上八幡における水に関する資料収集や視察受け入れ、調査研究の支援を行う。

(2) 実践の概要

具体的な実践概要として、2022年度には「あすの郡上八幡をみつけるゼミ—まちづくり物語編—」と題したゼミナール形式のプログラムを実施した。続く2023年度には「あすの郡上八幡をみつけるゼミ—10年後のまちへのスタート編—」と題した同様のプログラムを実施し、その内容を踏まえて「あすのわくわくこみちin柳町」と題した実証実験へと繋げた。2024年度には、事業化の一環として前年の実証実験内容の取り組みを複数箇所、複数回に拡大して実施する。

以降の章では、すでに完了している2か年分について、それぞれの実践における狙いと企画内容、その成果についてまとめる。

4. 1年目「まちへの理解を深める」

(1) 企画の概要

1年目の2022年度は、「あすの郡上八幡をみつけるゼミ—まちづくり物語編—」と題したゼミナール形式のプログラムを、計6回実施した。原則、毎回参加することを条件に参加希望を募ったところ、33名の登録があった。企画内で、この参加者のことを「ゼミ生」と呼称することとした。各回の開催記録を表-2に、会場の様子を図-3に示す。なお、9月24日に実施した回は「オープン参加編」（以下「OP回」）とし、ゼミ生以外の一般参加も受け付けた。

(2) 企画における狙い

1年目では、前述の全体目標を踏まえ、ゼミナール形式のプログラムを通して、参加者に対し、現状の危機の実態理解と将来へのモチベーション喚起、および今後の議論の起点となること、過去の郡上八幡におけるまちづくりについての情報提供を通してまちづくりの「作法」

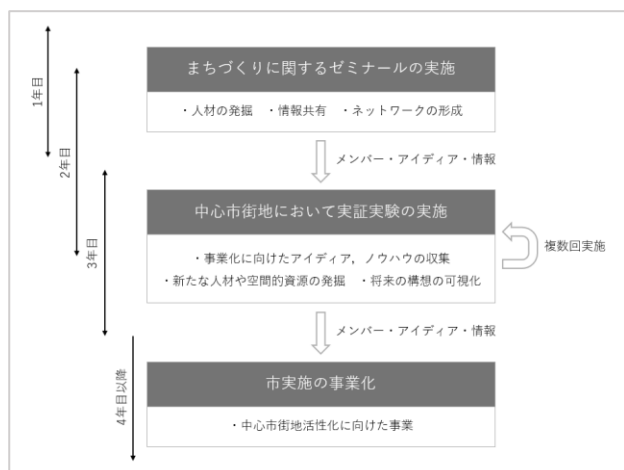


図-2 過疎地域指定を受けた取り組みのロードマップ

を理解すること、まちづくりに関心がある人の中で新たなネットワークが形成されることを期待した。

参加募集は郡上八幡に関わりがある人に広く行ったが、特にメインターゲットを町中で暮らす若い世代、町で独自の活動を行う人、移住者、市役所職員等とし、様々な属性の住民が交わることを期待した。

従来のWSは何らかの合意形成を目的とし、ある結論を導くことが求められるものが一般的であったが、ここではあくまでゼミ生に意識の変化が起こることを目的としている。具体的には、

- ・ 断片的な情報が繋がることで得られる納得感
- ・ まちへの興味、関心、愛着、シビックプライド
- ・ まちづくりの先人への感謝、リスペクト
- ・ 現状と将来の客観的理解、評価
- ・ 自分ごととしての認識と責任感

といった思いがゼミ生の中で生じることを期待した。

(3) 企画における工夫

a) 各回における話題提供

各回の前半では、過去半世紀ほどの郡上八幡のまちづくりの経緯を振り返る講義形式で進められた。話題提供は、八幡町役場（合併後、郡上市役所）職員として長年郡上八幡のまちづくりに携わった武藤が主に行ったほか、回によっては実際に現地を見て回った。内容としては、表-2の通り回ごとにテーマを設け、全ての回を通して参加することで現在までの郡上八幡におけるまちづくりの歩みをストーリーとして把握できるようにした。

b) ゼミ生のアウトプット

各回、後半では4~6名程度のテーブル単位で、講義内容に関するゼミ生同士のディスカッションの時間を設け、理解の促進と他のゼミ生と交流するきっかけとした。

表-2 ゼミナール（2022年度実施）の実施記録

実施回	開催日	タイトル	参加人数
第1回	6月10日(金)	『日庁舎記念館物語』	22名
第2回	7月11日(月)	『北町伝建物語』	23名
第3回	9月9日(金)	『用水今昔物語』	15名
OP回	9月24日(土)	八幡のまちづくり物語探訪	ゼミ生：10名 一般参加：24名
第4回	10月21日(金)	『道と交通物語』	13名
第5回	11月7日(月)	『まちなみをつくる建物語』	17名

*時間は各回19:00~21:00、OP回のみ13:30~16:00



図-3 ゼミナール（2022年度実施）の様子

またゼミ生には、各回終了後に「コメントシート」を、最終回終了後には「期末レポート」の提出を課し、振り返りと感想記入を求めた。「コメントシート」の記入内容は、記入者名とともに次回に資料として配布し、ゼミ生が相互に考えを把握できるようにした。

c) 各回における記録・アーカイブ

各回の記録は、それぞれ専門担当者による映像記録と図-4に示すようなグラレコによって行った。映像記録は、やむを得ない事情で欠席するゼミ生や復習をしたいゼミ生が視聴できるよう、編集した上で各回終了後にゼミ生内に公開した。グラレコはリアルタイムでレクチャーの内容、ゼミ生間でのディスカッションの内容をビジュアル化し、会場に即時掲示することで、その場での内容の理解を促すことに寄与した。

また、各記録は企画終了後、ゼミ生以外の住民がアクセスできるようにアーカイブする前提で準備をした。

d) オープン参加編の開催

先述のように、9月24日実施のOP回ではゼミ生以外の一般参加も受け付けた。通常回は平日の19:00~21:00である開催時間を土曜日の13:30~16:00として、より広い参加者として子どもを含めた住民および地域外の関心層をターゲットにしている。現在までのまちづくりの成果や課題が現れているスポットがまとめられたまち歩きマップを作成した上で、グループごとに実際のまちを見ながら理解ができる構成とした。これらにより、ゼミ生以外への知見の共有、意識の波及効果および本企画についての情報発信を狙った。

(4) 企画の成果

a) 参加実績

表-2の通り、全体を通して15名前後の参加があった。33名の登録者のうち、1回でも参加があったのは30名、3回以上参加したのは21名、OP回を除く5回全てに参加したのは3名であった。登録者の属性を見ると、自営業者が最も多く15名程度、市役所職員が10名程度、まちづくり関係の団体職員が5名程度であった。年代は30代、40代がそれぞれ10名程度、20代が5名程度、50代以上が5名程度であった。

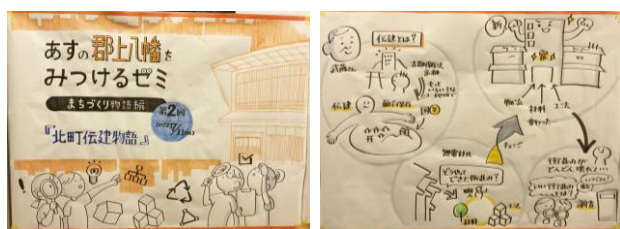


図4 グラフィックレコーディング（グラレコ）の例

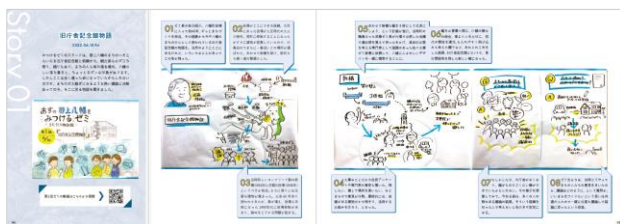


図5 セミナール（2022年度実施）の成果物

加したのが3名であった。登録者の属性を見ると、自営業者が最も多く15名程度、市役所職員が10名程度、まちづくり関係の団体職員が5名程度であった。年代は30代、40代がそれぞれ10名程度、20代が5名程度、50代以上が5名程度であった。

b) 参加者の意識

全体を通して参加者に芽生えた意識を、参加者から提出された「期末レポート」から概観する。まず、「新たに聞いた、知ったことなかで、印象深かったことは何ですか」や「郡上八幡というまちに対する印象や評価に変化はありましたか」という設問には、先人の努力や工夫、熱意への敬意や、現在のまちの姿に至るまでの経緯への理解が多く挙げられており、期待した「断片的な情報が繋がることで得られる納得感」や「まちづくりの先人への感謝、リスペクト」に当たる想いが確認できた。また、まちづくりにあたって議論や意見交換の重要性に言及するものも多く、参加者の多くが郡上八幡のまちなかで2001年頃に実施されたWSへの参加経験がない世代でもあり、協働によるまちづくりの体験と理解に効果的であったと考えられる。

一方で「今後あなた自身がまちに対しどのようなことができる、したいと思いますか」という設問には前向きな回答がほとんどである一方、具体的な方策に言及したものはほとんど見られなかった。各回終了後の「コメントシート」の提出状況が芳しくなかったことから、全体を通して参加者の中に「自分ごととしての認識と責任感」あるいはそれに根ざした主体的アクションへの動機が醸成される点にまで至らなかったと言える。

c) 本企画の成果物

本企画における成果物として、全5+1回分のレクチャー内容を、当日記録されたグラレコをベースにまとめた冊子を作成した（図-5）。ゼミ生が改めて学びを振り返るとともに、過去の郡上八幡におけるまちづくりをコンパクトにまとめた資料として活用可能なものとなった。

5. 2年目「自らアクションを企画する」

(1) 企画の概要

2年目にあたる2023年度に行った企画は、大きく2つに分けられる。まず、前年に引き続きゼミナール形式のプログラムを「あすの郡上八幡をみつけるゼミ—10年後のまちへのスタート編—」と題し、計5回実施した。前年と同様の参加条件でゼミ生を募集したところ、27名の登録があった。うち、前年から継続して参加したのは17名、新規で参加したのは10名であった。各回の開催記録を表-3に、会場の様子を図-6に示す。なお、外部講師として株式会社ワークヴィジョンズの西村浩氏を招

聘した第2回と、一般財団法人岐阜市未来のまちづくり財団の白橋利明氏を招聘した第3回は、ゼミ生以外の一般参加も可能とした。

(2) 企画における狙い

1年目実施のゼミナールにおける狙いを継続しつつ、本年度はよりアウトプットに重点を置いた内容とすることにした。具体的には、3か年通しての目標にある「郡上八幡のまちづくりの担い手の世代交代が起こるきっかけになる」「将来の郡上八幡に必要なアクションが明確になる」を念頭に、前年度の学びを踏まえながら具体的なアクションをゼミ生自身が立案することで、当事者意識をより高めることを期待した。さらに具体的な場所でのアクションを試行することで、その効果の把握と情報発信を期待した。

(3) 企画における工夫

a) 外部講師による話題提供

第2回と第3回は、アクティブな外部講師を招聘した講義形式のものとした。まちの中における小さなアクションの積み重ねによってまち全体に影響を与えた先進事例を紹介することで、ゼミ生それぞれが自分にできそうな、やってみたいアクションを具体化するための刺激を与えることを意図した。

b) ゼミ生のアウトプット

企画全体では、ワークシートを活用したディスカッションを主とする、ゼミ生のアウトプットを重視する構成とした。具体的には、第1回時に

- ・ 10年後のなりたい郡上八幡の姿
- ・ そのためにアップデートしたい点
- ・ そのために自分がやってみたいこと

をワークシートに記入させ、第3回時に外部講師のレク

チャーを踏まえた上で改めて同様のワークシートを記入させた。第4回には全員のワークシートの記入内容を共有し、グループごとに一つの提案を作り上げた。その上で、具体的な議論や作業を集中的に進めるプロジェクトチーム（以下「PT」）を参加者内の有志により結成することで、後述の実証実験に向けた土台を作り、第5回においてゼミ生全員で実証実験のコンテンツを詳細に検討し、最終的なアウトプットとして実際のまちで実証実験を実行するための提案をするという流れである。

c) 各回における記録・アーカイブ

第4回、第5回のディスカッションにおいては前年に引き続きグラレコによる即時記録を活用し、各回映像記録も残した。また、本企画より毎回の内容と参加者のコメントをまとめたニューズレターを作成し、これを内容のアーカイブとして、ゼミ生へのメール配信と次回開催時の配布を行った。

(4) 企画の成果

a) 参加実績

表-3の通り、全体を通して10～15名程度の参加があった。27名の登録があったうち、1回でも参加があったのは24名、3回以上参加したのは17名、5回全てに参加したのは4名であった。登録者の属性を見ると、自営業者が最も多く15名程度、まちづくり関係の団体職員が5名程度、市役所職員、その他がそれぞれ5名弱であった。また先述のPTには、ゼミ生から6名の有志が参加した。

b) 参加者の意識

本企画における狙いは、参加者らの手により実際のまちにおけるアクションを企画し、実行に移すということであった。後述する実証実験を実行するまで、ゼミ生が意見を出し、議論を交わす過程を体験することができた。ゼミ生からのコメントを概観すると、お互いに意見を交わす議論の重要性を感じた旨や、実証実験の現実感が高まってきた旨への言及があった一方、今後の自身の積極的な関わりに言及したものは少なく、主体性、当事者意識の醸成にはやや課題を残した。

c) 実証実験の提案

本企画の最大の目的は、ゼミナール内での議論をもとに実際のまちで実証実験を実行するための提案をすることであった。最終的には、第4回での提案、PTでの議論をもとに、道路空間や空き家活用のアイデアをベースにした企画を立案した。なお、アクションを実証実験と行うための実施場所の選定や大まかな内容の決定には対象地住民との調整が不可欠であることから、企画者である武藤らが担うこととなり、その点で、必ずしもゼミ生によるボトムアップ式で決まったとは言えなかった点に課題を残した。

表-3 ゼミナール（2023年度実施）の実施記録

実施回	開催日	タイトル	参加人数
第1回	6月16日(金)	2年目のためのウォーミングアップ	14人
第2回	6月28日(水)	全国各地の元気なとりくみに学ぶ まちのみらいのつくり方	ゼミ生：21人 一般参加：15人
第3回	7月7日(金)	岐阜柳ヶ瀬のとりくみに学ぶ まちのみらいの見つけ方	ゼミ生：13人 一般参加：9人
第4回	8月5日(土)	10年後の郡上八幡を思い描く	11人
第5回	10月2日(月)	あすの郡上八幡へのキックオフ	13人

*時間は各回19:00～21:00



図-6 ゼミナール（2023年度実施）の様子

6. 2年目「自ら企画したアクションを実行する」

(1) 企画の概要

前述の経緯を経て、2023年11月に「あすのわくわくこみちin柳町」と題して、路地活用のイベントを実証実験として行った。

具体的な内容としては、メインの通りから外れた路地空間を通行規制し、路地空間とその沿道の空き家、また住居の庭部分等を使用して人々が滞留できる設えや企画を配置した。ターゲット層を子連れの世帯やお年寄りまで広く捉え、フライヤーをポスティングや子供会・幼稚園への依頼を通して配布した。当日の会場におけるオーガナイザーはゼミナール企画のゼミ生や、会場周辺の住民、運営補助にあたった早稲田大学景観・デザイン研究室の学生が担った。実施記録を表4に、当日実施した企画の概要を表5に、会場の様子を図7に示す。

(2) 企画における狙い

本企画では、3か年通しての目標にある「将来の郡上八幡に必要なアクションが明確になる」のために、過疎化の進行により課題が多い地区においてできそうなこと、将来やりたいことを実際の風景として表現することを目指す。それにより、

- ・ 次年度に続く実証実験におけるアイデア、ノウハウを得ること
- ・ 課題の多い地域における関係者を巻き込み、人材や空間的な資源を発掘すること
- ・ 今後のまちづくりにおいて必要なアクションへの希望とイメージを広く共有すること

を成果として期待した。

(3) 企画における工夫

a) 対象地の選定

対象地は、柳町と呼ばれる地区の本通りと並行した小さな脇道で、全長は約50m、幅員は車1台が辛うじて通行できる程度で、沿道住民以外の往来はほぼ無い。沿道には民家が13軒立ち並び、うち約半数が空き家である。

この場所を対象地に選定した理由は以下の通りである。

- ・ 中心市街地の周縁部に位置する空洞化が深刻なエリアの一つで、今後の事業化のモデルとなり得る
- ・ 通過交通が少なく、車両通行規制が容易である
- ・ 利活用の現実性が高い空き家、空き家が複数存在する
- ・ 周辺住民の合意が得られる
- ・ ヒューマンスケールで、軒下や庭などの空間に多様性がある

b) 既存ストックの活用

表5にあるように、企画の実施にあたっては既存ス

トックを活用した。先述の通り、沿道には空き家が多数並んでいるが、うち権利者から了承が得られた一軒では、建物内部を開放し、内部と外部を隔てる引き戸を開放することで、会場の一部として活用し、絵本やボードゲームで遊べる空間とした。また、入居中の住居においても、庭部分やピロティ部分、駐車場部分等を会場として活用した。さらに、その他の家屋についても、軒下にベンチを設置する、段差を腰掛けとして利用する等、屋内外をつなぐ中間領域を最大限活用した。

一方で道路空間は先述のように交通封鎖した上で、一部には人工芝を敷き、また一部は近くにチョークを用意して舗装に絵が描けるようにする等、多様なアクティビティの場となるよう活用した。

c) ゼミ生・周辺住民によるオーガナイズ

会場における各企画のオーガナイザー役は、ゼミナール企画のゼミ生や周辺の住民が担った。特にゼミ生は、前年度からの一連のプログラムにおいて、主体的にまちづくりの実践に関わることが期待されてきたため、本企画での主体的な関わりは特に重要な意味を持つ。ゼミ生の当事者意識が、ゼミナールに参加していない会場周辺の住民まで波及することも期待した。

表4 実証実験の実施記録

実施日	2023年11月11日(土)、12日(日)
実施場所	郡上市八幡町柳町203付近の路地
来場者数	約300名(推計)

表5 実証実験で実施した企画の概要

企画名	実施場所	概要
駄菓子屋よんぱん	民家ピロティ部分	他企画の参加状況に応じて駄菓子がもらえる
お庭で宝探し	民家庭部分	くじ入りの「宝」を探し、駄菓子と交換
まちなか図書館	空き家内部	用意された絵本やボードゲーム等で自由に遊べる
みんなで作るひみつきち	空き家中庭・倉庫部分	用意された段ボールとテープで自由に遊べる
こみちでお絵描き	道路空間	チョークやクレヨン等で舗装面や画用紙に落書きができる
あたたか豚汁	民家庭部分	地元住民により仕込まれた豚汁が振る舞われる
木っ端であそぼう!	空き家軒先部分	用意された木っ端と油性ペンで自由に遊べる
空から見たこみち	表通り民家土間部分	会場の様子を上部より撮影した映像を、表通りで視聴できる
水屋再現プロジェクト	民家軒先部分	かつて存在した水屋を一から制作し、再現する
スタンプラリー	会場全体	企画に参加しスタンプを集め、駄菓子と交換できる
あすのこみち寄合	空き家内部	6-3)d)参照



図7 実証実験における会場の様子

d) 当日の様子を受けたディスカッション

企画 1 日目の 16:00~18:00 に、会場沿道の空き家を利用し「あすのこみち寄合」と題した、ディスカッションの場を企画した。参加者はゼミ生や会場周辺の住民、来場者を想定し、企画の様子を振り返りながら、これからの郡上八幡のまちづくりに活かせる点等が議論されることを期待した。

(4) フォローアップ調査

実証実験中と終了後に、以下の調査を行った。

a) 来場者アンケート調査 (n=51)

会場内の 2 か所に来場者アンケート回答用紙と回収箱を設置し、併せてスタッフが直接来場者に用紙を手渡しし、回答をお願いした。結果、計 51 枚を回収した。

b) 会場アクティビティ調査

会場内において、毎時 05 分~20 分の 15 分間、調査員が目視で来場者の位置を確認し、調査用紙上に「立つ（長時間）」「立つ（短時間）」「座る（長時間）」「座る（短時間）」いずれかの行為と、大人/子どもの区別の情報をプロットした。

c) 会場周辺住民アンケート調査 (n=13)

会場が位置する中柳町地区の世帯に、2023 年 11 月 16 日(木)に地区長経由で回覧にてアンケート用紙を全戸配布した。11 月 27 日(月)までに計 13 枚を回収した。

d) 会場周辺住民ヒアリング調査 (n=16)

会場に特に近い中柳町地区 3 班、4 班の世帯に対し、11 月 14 日(火) 15:00~19:00 頃直接訪問し、在宅だった計 16 名にヒアリング調査を実施した。

(5) 企画の成果

a) 来場実績・来場者の反応

2 日合わせて延べ 300 名程度が来場した。

来場者の反応を、先述の来場者アンケート (n=51) の結果から概観する。まず、来場者の属性は、郡上八幡の郊外に住む子供連れ世帯が多かった。それも影響し、好意的な印象を持った理由は「子どもたちの姿や声が聞こえる」(n=32) や「車が来なくて安心」(n=28) が上位に挙がった。また、会場の様子を見た印象は「狭い場所の良さ、魅力が感じられた」(n=40) や「古い建物の使い方の可能性が感じられた」(n=24) が上位に挙がっており、工夫で挙げられたヒューマンスケールの空間創出や既存ストックの活用が好印象に繋がっていることがわかった。また、次点で「地元が主役になっていて好感がもてた」(n=17) も選ばれており、ホストの存在が来場者にも伝わっていたと考えられる。

b) 今後の実証実験・事業化への知見

以上の結果を踏まえ、本企画から得られた成果、知見を以下にまとめる。

郡上八幡ではまちなか全体の人口減少が進むが、その状態は一律ではなく、環境条件が相対的に不利な周縁部に空き家、空き地が集中しているながらも、そこへの方策が正面から検討されていなかった。本企画で、まちなかの多様性の観点からも、こうした周縁部ならではの「あすのわくわく」を構想し、実証実験によって可視化することができた。つまり不利とされていた条件を潜在的なストロングポイントとして活かす可能性とその形を示すことができた。具体的には以下である。

- ・ 子育て環境に良好な閑静な佇まい
- ・ 自然環境、水辺環境が残る良好な住環境
- ・ 活用可能な空き家、空き地の多さ
- ・ 競合利権（観光、交通等）の少なさ
- ・ 人口減の深刻さによる新規受け入れへの寛容性

さらに、本企画によって、ヒューマンスケールの道路、建物内外をつなぐ中間領域等の空間的な特色に加え、見守る人やホスト役の人の存在により、安心感のある場が形成されたほか、想定していなかった主体同士のふるまいの接点や偶発的な交流が生じる等、新たな価値を生み出し得ることが示せた。

これらの成果を受けて、既存コミュニティが地区外の個人や団体を受け入れ、ともに主体性を発揮し協働することで、周縁部固有の魅力を高め、まち全体の持続に寄与することが示唆され、今後同様な箇所へ展開していく期待に繋がった。

7. 今後の予定

2024 年度の企画として、9 月下旬と 11 月下旬に 2023 年度と同様の実証実験を町内の異なるエリアで行う予定である。これらの実施を受けて、ゼミナール企画から継続して参加したゼミ生に対しヒアリング等の調査を行い、当初目標の一つであった「郡上八幡のまちに対して責任感を持って取り組む人が明確になる」「郡上八幡のまちづくりの担い手の世代交代が起こるきっかけになる」という観点から検証を行う予定である。

NOTES

注1) 2022 年度の「八幡市街地活性化調査・事業化メニュー検討事業」には、他に住民や団体、事業者向けのアンケート実施業務や有識者へのヒアリング調査業務等も含まれる。その結果は本稿で言及する企画においても参照しているが、ここでは詳細に触れない。

REFERENCES

- 1) 郡上市：八幡都市計画マスタープラン（第 2 期），2021。
- 2) 総務省統計局：令和 2 年国勢調査，2020。
- 3) 郡上市：郡上市過疎地域持続的発展計画（令和 3 年度~令和 7 年度），2022